

日本語と中国語の敬語表現

—吉本ばななの作品とその翻訳を題材に—

陳 瑞 紅*

1. はじめに

中国語における敬語の問題は、主に次の三つが指摘されてきた。現代の中国語においては、敬語があまり使われないこと、社会主義革命や文化大革命という社会体制の変化により、敬語の衰退が促されたこと、伝統的な敬語の全面的な考察に取り組むことがまれなことである。これに対し、中国語の敬語研究に関しては、特にここ10年の間に関心がしだいに高まってきて、中国の学者たちによる研究成果が相次ぎ発表され、中国語における敬語の体系構築を目指す動きが見えてきた。ところが、台湾の中国語社会における敬語は論じられることが多くないように思える。そこで、日本語における敬語表現と対照比較しながら、台湾の中国語社会における敬語表現の運用実態を考察したい。その結果によって、中国語の敬語システムの体系的な構築を発展させることに寄与したい。本稿では、1989年から2004年にかけて、台湾で出版された吉本ばなな¹⁾の著作の翻訳(12点19種)を取り上げ、研究対象²⁾とする。なぜ吉本ばななの作品とその翻訳を題材にするのか。理由の一つは、吉本の作品は台湾でベストセラーであり、「死」・「生」・「恋愛」・「家族」というテーマを中心に、10代・20代の若い女性の心に潜んでいる彷徨いと空しさを繊細に描くので、特に女性読者の共感と呼び、大きな支持を得ていることにある。また言語的には、吉本作品の文学表現上、かつての伝統的な小説の文章の常識を覆して、日常の言葉という新しい小説の文体を作りだしていることがある。それ故、その文学作品における日常会話の翻訳を通して、間接的に台湾の言語生活での敬語運用の実態を観察することが可能であろう。そこで、台湾における中国語社会の背景をふまえた上で、研究対象の会話文に現れた敬語表現を調べ、日本語の敬語表現と対照しながら、台湾の中国語社会における敬語表現の運用実態を考察したい。

2. 先行研究

先ず中国語敬語の「消滅説」に関し、日本において、藤堂明保(1972・1974)は、中国の生死観に深く関わった「面子」は中国の敬語のあらわれという観点から、次のように説明した³⁾。

身分差別のはっきりした社会において、中国の敬語は官僚の言葉であり、「面子」のあらわれであった。1949年の革命により、官を倒して一挙にして開放的な人民社会にかわり、すべての人が原則として同じレベルにむき出されたと同時に、「面子」もなくなった。敬語のあらわれとしての「面子」という素地がなくなれば、敬語の大部分も消えうせるわけである。1966年から数年にわたって続いた「文化大革命」という変革により、知識人のエリート意識を粉碎され、人間の意識の面まで立ち入った。

以上のような藤堂氏の分析と結論に対し、蘇徳昌(1979・1981・1987)は、次のように指摘し

*比較文化学専攻

た⁴⁾。

文化大革命により人間関係が大きく揺れ動いた時期の中、たとえば、敬称という敬語が「造反派」たちの目が届かない所では結構使われていた。続けてこう述べている⁵⁾。「中国は官こそ倒したが、幹部は依然として存在しているし、敬語もきえていない。そして、たとえ官を倒しても、敬語が必ずしもきえとは限らない。」

次に、中国語における敬語の史的変遷に関し、王鉄橋（1990）は、「中国語の敬語は封建官僚体制下の文語体の古代敬語と清末・辛亥革命・五四運動以後に文語体敬語と白話文敬語の並存期と社会主義革命後の現代中国語の敬語とに分けられる」、と述べている⁶⁾。さらに、彭國躍（2002）は、14世紀から20世紀90年代までの間に書かれた口語体小説（30編）を対象に、社会的変遷と敬辞⁷⁾の変化との共振性を探り、中国語敬辞体系の衰退プロセスを次の3つの段階に分けて以下のように説明した⁸⁾。

14世紀から19世紀末までつまり元・明・清王朝時代にあたる繁栄期、20世紀前半つまり中華民国時代にあたる衰退期、20世紀後半つまり中華人民共和国時代にあたる消滅期である。

さて、文法形式に乏しい中国語敬語の体系性に関しては、日本において、太田辰夫（1972）は、中国の敬語は（一）皇室とくに皇帝に関する語、（二）人称代名詞、（三）人称に関係ある名詞、（四）官職身分、（五）動詞・あいさつ語、（六）表記法との六種類に分かれる、と指摘した⁹⁾。同様に興水優（1977）・木村英樹（1987）による中国語の敬語が存在する形に関する研究結果も発表されている。王鉄橋（1989）はこれらの説を継承し、日中の敬語表現の対照研究という観点から、中国語の敬語表現を人称的（即ち、人の呼び方）、選語的（即ち、語彙的な手段によるタイプ）、接辞的（即ち、接辞的な手段によるタイプ）、構文的（即ち、構文的手段によるタイプ）敬語表現という分け方で論じた。

「中国語にはその言語の構造によって体系的敬語表現が少ないように見えるが、実は社会、文化とくにその中の人間関係のあり方に応じたさまざまな敬語要素は違った構造に組織されているかも知れない」、という¹⁰⁾。

劉宏麗（2001）・彭國躍（2002）は組織化という観点から中国語の敬語を考察し、その体系構築を試みている。

最後に、台湾における中国語社会を対象にした研究成果があまり発表されていないようであり、楊慧珠と柴田武（1984）は、社会言語学の立場から、語彙的な手段による中国語の敬語表現に日本語のように上下関係が働くよりも親疎関係のほうが強く働くことを考察している。

2.1. まとめ

以上に見てきたように、中国語の敬語研究は、70年代は日本の学者による研究成果が中心となり、それに基づき、80年代からは蘇徳昌をはじめ中国人の学者が、言語研究の一つの課題として敬語研究に取り組み始めた。それからここ10年の間に関心がしだいに高まってきて、中国語における敬語研究の発展期にたどり着いたと言えよう。今後、中国語の敬語研究においては全面的な考察及び体系的な敬語法の構築に重点を置いて進んでいくことが予想される。また、台湾での中国語社会における敬語研究をさらに重視すべきであろう。

3. 研究内容

本稿では、台湾における中国語社会の背景、及びその敬語表現の運用実態という二つにわけて論を進めることとする。先ず台湾における中国語社会の背景に触れる。日本植民地時代と中華民国時代に行われた言語政策によって台湾の言語生活に与えられた影響が現在になってもなおたくさんの名残を残している、その背景を頭の中に置きながら台湾での中国語敬語をみていくのが適切だと思われる。次に、台湾の言語生活で使用される日常的話し言葉に重点を置き、吉本作品とその翻訳を題材にし、その用例を通して、間接的に台湾の中国語社会における敬語表現の運用実態を観察する。

3.1. 台湾における中国語社会の背景

台湾の歴史を言語的な観点から、齋藤齊（1995）、及び若林正丈（1997）が述べたところをまとめると、次のとおりである。

現在、台湾の人々が用いる言葉は三種類に大別することができる。一つ目は、エスニック・グループの母語である。つまり、本省人（戦前から台湾に定住している漢族）の話す閩南語と、客家人（主として広東省北部、福建省南西部から移民）の話す客家語、そして台湾先住民族各族の言語を指す。二つ目は、日本の植民地統治時代（1895～1945年）、公的制度はすべて日本語使用一本化する方向付けが確立した日本教育を受けた世代が話す日本語である。三つ目は、中国普通語（マンダリン、台湾では北京語とも通称される）である。戦後、日本の敗戦から中華民国政府は、日本語の「国語」から中華民国の「国語」である中国普通語への言語シフトを台湾における文化政策の最優先課題としてきた。日本語と中国普通語、つまり台湾の人々にとっての戦前の「国語」と戦後の「国語」であった、というわけであり、台湾の言語生活では複数の言語を取り混ぜて使うことがまみられる。日本教育世代のお年寄り、本土言語と日本語のチャンポンで話をし、若いマンダリン教育世代はマンダリンと本土言語のチャンポンは普通のことである。近未来の台湾社会の言語生活は閩南語とマンダリンの二極構造に移行していくことが予測されている。1994年に中山人文社会科学研究所（旧三民主義研究所）の機関の行った「台湾地区社会意向調査」を分析した1995年の台北中央研究院民族学研究所による中間報告は、その過程を裏付けているともいえよう。台湾における四大エスノ集団である本省閩南人、本省客家人、外省人、原住民のなかで、本省閩南人は経済生活での地位向上が著しく、外省人が高い教育レベルを維持しながらも中流ホワイトカラーに団塊状態で停滞していることが読み取れる。最弱者が原住民である。本省閩南人の浸透圧をもろに受けている本省客家人は、言語的にアイデンティティが危機に瀕しており、閩南化、孤壘化、マンダリン化という複雑な行路を模索している姿が伺える。

次に、上述した戦前の「国語」と戦後「国語」教育によって、現在も台湾の言語生活に残されている影響をみたい。本稿では、研究対象における用例を通して、敬語表現の用例を中心に（A）日本植民地時代による「国語」教育の名残、（B）中華民国政府時代による「国語」教育の名残、の二つに分けて用例分析を行い、次のようにまとめる。

（A）日本植民地時代による「国語」教育の名残

日本語教育を受けた世代では、相手を「～桑（～さん）」と呼ぶのは一番代表的なものであ

る。『体は全部知っている』『みどりのゆび』の一節を例として見よう。

主人公である「私」は植物好きだった祖母から植物を輝かせる「みどりのゆび」という力を受け継いだとの話である。去年の冬、「私」の祖母は末期の子宮癌で入院することになった。ある午後、「私」は病室を訪ねに来て、窓にあるシクラメンが目に入ったので、祖母に聞いてみた。

「(前略) どうしてシクラメンの話？」

「(前略) シクラメン。もう葉ばかりになっちゃったけど。(略) 中原さんにももらったんだけどね」¹¹⁾

「(前略) 怎麼想到仙客來的？」

「(前略) 仙客來。只剩下葉子了。(略) 是中原桑拿來的」¹²⁾

本稿でとりあげた用例のほかにも、日常生活で実際に一般名詞として使われる語があった。たとえば、「多桑 (父さん)」「歐吉桑 (おじさん)」「歐巴桑 (おばさん)」などである。

(B) 中華民國政府時代による「国語」教育の名残

台湾と中国の言語上の違いについて、H・J・オータら (1991) は次のように指摘した¹³⁾。「意思の疎通という角度から台湾海峡の兩岸の人の言語上の違いを見ると、比較的違いの大きいのは、発音 (捲舌音、R 化韻、輕音など)、文字 (簡体字)、単語 (水平、水準『どちらも水準の意』) などの外見上の形のある違いではなく、ちょっと外からは分らない形のない違いである。」〈原文のまま引用〉その言葉遣いの違いについて、王鉄橋 (1990) は次のように述べた¹⁴⁾。「古代敬語の脈絡を引いた文語調の敬語表現が、戦前の上流社会、文人、商人社会の敬語として存在していた。たとえば、『令尊』『令堂』『令姐』『令兄』『令妹』(略)『家父』『家母』(略) が、新中国が成立してから台湾と一部の年配の知識人の書簡のほかは、殆んど使われなくなった。」、という。

次は、『ハードボイルド／ハードラック』『ハードラック』の一節である。

「私」の姉が、「結婚退職するために、徹夜の連続で引き継ぎマニュアルを作っている時に脳出血で倒れて」脳幹の機能を失ってしまった。入院してから一ヶ月になる。姉の婚約者は「私」の両親が申し入れた婚約解消を承諾した。その婚約者には、四十過ぎのお兄さんがいて、「境」という人。彼は「ほぼなんの関係もない人なのに、わりとしょっちゅう病院に来た。」この日も、「私」のお姉さんをお見舞いに来た。

「境くんは弟の行動をどう思ってるの？」私はたずねた。

「彼らしい小心さだと思って (略) もうすぐ、心の整理がついて、死ぬ時には絶対に立ち会おうと思うよ。」

(省略)「どっぴりとひたりこんでいると、お姉ちゃんが遠くなると、お母さんも今朝言っていたよ。」¹⁵⁾

「小境君對弟弟的行徑作何想法？」我問他。

「我認為那種小心謹慎真就符合他的個性 (略) 可他很快就會釐清自己的心緒，等到令姊要辭世的時候，

肯定會出面的。」(省略)「令堂今天早上也說過，你要是儘著泡進憂傷裡，姊姊會變得遙不可及。」¹⁶⁾

研究対象を調べた結果、台湾の言語生活での上述したような接辞的敬語が頻繁に使用されていることがわかる。

3. 1. 1. まとめ

以上、言語的には、台湾の中国語社会の背景を、過去一世紀をちょうど半世紀ずつ日本植民地時代による「国語」教育、と中華民国政府時代による「国語」教育、と分けて述べた。80年代、台湾を訪れたときの見聞を、金田一春彦（1988）は、「急速な北京語の教育・普及によって日本語は衰えて行ったが（略）家によってはまだ畳を敷いてある家があり、タタミと呼び、タタミ職人もいるという（略）寿司・油揚げ・煎餅などはそのまま漢字を使い（省略）」と述べた¹⁷⁾。その一方、90年代に入り、齋藤齊（1995）は、「過去の日本語教育世代が後退していく中で、若い世代が全くの外国語感覚で取り込んだといえる。」¹⁸⁾と指摘したように、日本語学習ブームになっている現在、台湾の人々にとって日本語を第一外国語として接するのは一般的な考えである。将来、日本植民地時代による「国語」教育の名残は、若林正丈（1997）が言ったように、「日本語もあと10年もすれば台湾人の日常語の一部ではなくなる（省略）」¹⁹⁾。それにひきかえ、「令堂」「家母」などの古代中国語から受け継がれた伝統的な敬語表現が、台湾の言語生活では頻繁に使用されることがわかる。

3. 2. 台湾の中国語社会における敬語表現

吉本作品とその翻訳を題材にし、作品における用例を通して、台湾での敬語表現の運用実態を検証する。本稿では、主に次の三つを見ていくこととする。

- （一）第二人称代名詞—「您」という敬語を中心に
- （二）中国語における「丁寧語」の問題—日本語の「です・ます体」との対照比較を中心に
- （三）中国語には尊敬用法と謙譲用法をともに持つ語があるのか。—「嘗」²⁰⁾という語を中心に

3. 2. 1. 第二人称代名詞—「您」という敬語を中心に—

現代中国語の第二人称代名詞には「您」という敬語がある。「您」は複数形から宋元以後単数の尊称に転じたといわれる。「您們」という複数形はときに書き言葉として使用されるが、話し言葉では「您二位」、「您三位」、「您幾位」などのようにいわれる。

その使用範囲を日本語の第二人称代名詞と比較すれば、彭國躍（2002）は、次のように説明した²¹⁾。「日本語の人称代名詞には『あなた、きみ、おまえ、きさま』、『わたくし、わたし、ぼく、おれ』など様々な待遇レベルの表現が使われている。それに比べて、近代中国語の人称代名詞の待遇的な使い分けは、2人称の“你”、“您”にとどまり、極めて未発達と言える。」という。ところが、王鉄橋（1989）はすでに指摘したように、「日本語より少ないようである。敬語専門のものは“您”だけである。しかし、この“您”の活躍ぶりが目立ち、敬語表現の機能が高いと思われる」²²⁾、という。

ところで、第二人称代名詞の使用上の制限について、日本語の場合は、金田一春彦（1988）は次のように指摘した²³⁾。

「注意すべきは、第二人称代名詞を絶対に使わない間柄というものがあることである。親・兄・姉・おじ・おばに対してはそうで、この場合、「お父さん」とか「お兄さん」とか一般の名詞を使う（略）ところで、現代ではそういう関係以外でも第二人称代名詞が使えなくて不便をしている場合がある。目上の人に対する適当なものがないせいだ（略）第二人称代名詞が使いにくいのは、

日本語の場合、第一に相手を指す代名詞がどんどん格が下がってくることによるが、それ以外に、日本人の頭の中には、西欧人とちがい、代名詞という単語で相手をさすのは失礼に当たるという考えがあるようだ、中国人にもこれと同じような考えがあり、昔から、大夫・公子・陛下・足下のような身分や場所を示す語で相手と呼ぶ風²⁴⁾が盛んだった。』、という。

ところが、中国語の第二人称代名詞「您」の場合は、その制限がないようである。もう一つの特徴としては、「您」が決まれば、語及び文の表現も自ら敬語表現に決まることである。

次に、第二人称代名詞の「您」という敬語の使用頻度を主に見ていくことにする。ねらいは、台湾の言語生活での使用状況の把握である。(A) 会話と、(B) ナレーションに分け、さらに親疎関係²⁵⁾という観点から (A)・(B) をそれぞれ「ソト」と「ウチ」に分けてみることにする。用例を分析した結果、次のように総合的にまとめて説明する。

- 【1】第二人称代名詞の「您」は、台湾の中国語社会においては頻繁に使用され、その頻度が目立つことがわかる。
- 【2】日本語の第二人称代名詞とは違って、「ウチ」関係である両親に対しても、第二人称代名詞の「您」を使うことが可能であることがわかる。だが、「ソト」関係に使用された用例が多い傾向がみられる。まず、(B) ナレーション「ウチ」の場合、『とかげ』『大川端奇譚』の中の一節を例として見よう。

主人公である明美は、一年前の7月、取引先の会社の社長の葬儀に部署を代表して出席したきっかけで今の婚約者と知り合った。ある土曜の昼間、明美は婚約者の家に出かけようというとき、父が結婚祝いを届けに来た。

「おみやげに、と思って倉庫からみつুকろってきたんだ。(省略)」父はいい、ふろしきをとき、木箱を開けた。重くて大きな器が出てきた。「ありがとう。」(省略)私は嬉しく思い、微笑んだ。²⁶⁾

「臨時到倉庫去挑的，送給你當作禮物 (省略)」爸說著把裏巾拿掉，打開木盒子。

拿出來的是一只又重又碩大的器皿。「謝謝您。」(省略)我高興地笑了。²⁷⁾

もう1例、(A) 会話「ソト」の場合、『ハネムーン』の一節である。

まなかは幼なじみの裕志と「戸籍上の結婚をしたのは5年前、二人が18の時だった。」「カリフォルニアから裕志のお父さんの友達という人が」裕志をアメリカへ連れて行くという話が持ち上がっていた」ので、二人は家出をした。伊東の浜辺で親切な運転手さんと知り合い、熱海まで載せてもらう約束をした。

「おじさんほんとうに来てくれたのね。」私が言うと、

「あんたたちもほんとうに一日中、ぶらぶらしていたんだね。」と人のよさそうな、話し好きのおじさんは本気で驚いていた。²⁸⁾

「叔叔您真的來了。」我說。

為人親切、喜歡聊天的司機叔叔訝異地說道：「你們兩個真的在這邊消磨了一整天啊。」²⁹⁾

- 【3】第二人称代名詞の「您」が用いられれば、文の全体が敬語表現となることがわかる。「叔叔您真的來了」など、「您」だけとりかえれば動詞はそのままでも敬意表現となり、「不好意思～」「不要客氣～」「請教～」「請～(一下)」「幫(您)～」などの尊敬の程度が高い文の表現が、「您」に連動して用いられる。

3. 2. 1. 1. まとめ

前述したように、第二人称代名詞の「您」という敬語を取り上げ、次の三つを検証した。第二人称代名詞の「您」という敬語は、台湾の中国語社会における使用頻度が目立つこと。日本語の第二人称代名詞における使用上の制限と違い、「您」の場合は家族・親族・目上の人に対しても使うことが可能であること。「您」が用いられれば、文の全体が敬語表現となること、以上三つである。「您」は中国語における敬語表現で大きな役割を果たし、その語と伴う敬語表現が多く見られることがわかった。

3. 2. 2. 中国語における「丁寧語」の問題

—日本語の「です・ます体」との対照比較を中心に—

先ず丁寧語の日本語史における位置付けをみることにする。安秉禧（1981）は次のように述べた³⁰⁾。「日本語の丁寧語は、平安時代に出始め発達してきたが、話し相手に対する直接的な尊待である対者敬語となって一般化したのは、現代に入ってからのことである。」、という。井上史雄（1995）はさらに次のように説明した³¹⁾。デスとマスは並べられることが多いが、マスが発展したのは室町以降である。それにひきかえ、デスは近代の発達であり、明治以降東京に広がった。現在、丁寧語・丁寧表現の使用範囲拡大の動きが見え、デスマス体は、書きことばの様々なジャンルに出現している。学術論文しかり、新聞でも、社告、読者への通知、記者の署名記事の一部に表れる、デアル体とデスマス体が混用されることもある。弾き語りの日常的話しことばではデスマス体が出現している。

現代に近づくほど、丁寧語が発達した原因は、(ネウストプニー・1974) (安秉禧・1981) (金水敏・1995) (菊地康人1994・1996) の説をまとめると、以下のように説明されている。

発話内容よりも発話状況により強く依存するという点で、つまり、話題の人物に対する配慮よりは、目の前の話し相手に対する配慮が、敬語の使用にもっと大きく作用した結果でもあろう。そこで、丁寧語の使い分けは、話題の人物の上下や、内か外かといったことを考えなくて、親しさの程度によるのである。また言語的には、尊敬語・謙譲語と違って、文法的交替形がなく、かつ接続が単純で誰でも使える敬語である。

さて、中国語における丁寧語の問題について考えてみる。曾根博義は、「吉本ばななの小説は、(略)随所で語り手としての『私』が、突然『です』『ます』体で読者に話しかけてくる。(略)この巧妙な語りの装置が、読者を身近に引き込んで離さない吉本作品の、文学表現上の最も大きな力になっている。」³²⁾、と述べた。ところが、この「です・ます」文体表現を適切に中国語に翻訳するのは難しいように思える。

この理由の一つは、すでに彭國躍（2002）により指摘されている。彭は、「近代中国語の敬辞には、日本語の丁寧語のような、話題内容と完全に切り離された聞き手のみへの配慮を表す表現は存在しない。聞き手であろうと、第三者であろうと、敬辞は登場人物や話題内容を通してしか表現できない。聞き手に関しても、それが登場人物との関わりで話題に登って始めて、敬意の対象となり得るのである。」³³⁾、という。もう一つの理由は、中国語の敬語表現は主に主語によって（たとえば、上述の二人称代名詞「您」）表現するのに対し、主語の動作・状態を表わす手段が乏しいことにあるであろう。

そこで、以上に見てきた日本語の丁寧語を中国語との対照研究の基盤として、日本語の敬語体系は、登場人物への敬意よりも、相手への敬意の方が近代的であるようであり、いわゆる尊敬語と謙譲語（素材敬語）から新しい丁寧語（対者敬語）への順で成立したものと推測されている。本稿では、その論理に基づき、現代中国語において、「丁寧語」はまだ整然たる形式が確立していないが、存在していると仮定し、考えてみたい。この仮説を検証するために、吉本作品の「あとがき」とその翻訳における丁寧語－「です・ます体」を問題の中心に取り上げることにする。理由の一つは、吉本の「あとがき」に用いられた文体は「である体」ではなく、「です・ます体」として現れ、著者はじかに本を読んでいる読者に話し掛けてくるように親切に感じさせることにある。またその文体をもとにした翻訳の文章にも同じ親しみが現れたことがもう一つの理由である。

次は、研究対象の「あとがき」を調べ、対象人物が聞き手である場合を中心に、その用例をまとめてみる。『キッチン』の「あとがき」を例に挙げて見よう。

「まだ力足りない私の小説を読んで下さった見知らぬ皆様、少しでも元気になってくだされば、これ以上の幸いはないと存じます。また必ずお会いする、その日までどうぞお幸せにお過ごし下さいますよう祈ります。」³⁴⁾

「願意閱讀我不成熟小說的許多不認識的朋友，如果因為我的作品而讓各位增添些許生活的勇氣，那就是我無上的榮幸了。我們一定會再見，但願到那天為止大家都過得幸福快樂。」³⁵⁾

すべての用例が聞き手である読者を対象として使われるものであり、読者に対する感謝の気持ち・あいさつという文脈であることがわかる。それに、話し手である著者が読者に話し掛けてくるような親しみを感ぜられる。

3. 2. 2. 1. まとめ

以上に見てきたように、日本語の「です・ます体」を適切に中国語に翻訳することが困難であるという問題に触れた。その原因は果たして従来言われてきたように中国語には「丁寧語」が存在していないためだろうか。「です・ます」文体で書かれている吉本作品の「あとがき」を題材にし、この文体をもとにした翻訳の文章も、日本語の「丁寧語」に現れる親しみを感ぜさせるものであるので、現代中国語において「丁寧語」はまだ整然たる形式が確立していないが、存在していると仮定し検証した。その結果、すべての用例が聞き手（読者）に対する感謝の気持ち・あいさつを示す文脈であり、その話し手（著者）の聞き手（読者）への思いが伝わってくることからすれば、中国語にも「丁寧語」として扱われる要素が存在しているものと思われる。

3. 2. 3. 中国語には尊敬用法と謙譲用法をともに持つ語があるのか。

－「嘗」という語を中心に－

「嘗」という語は果たして「尊敬語」・「謙譲語」という二つの性格を持つ敬語であろうか。この問題を考え進めるために、先ず「嘗」という語は敬語であることを検証してみる。そこで、「您」・「你」と「嘗」・「吃」の使い分けを条件とし、次の四通りの例を作り、その連帯関係によって敬語表現がどのように現れるのかを考察する。

- ①「老師、您嘗一口吧（先生、一口召し上がってください）」
- ②「老師、您吃一口吧（先生、一口食べてください）」
- ③「老師、你嘗一口吧（先生、一口召し上がってください）」
- ④「老師、你吃一口吧（先生、一口食べて）」

前述したように、日本語の場合は目上の人に対する第二人称代名詞の使用が制限されることがある。ところが、中国語の場合は、上記の用例のように、目上の「先生」に対し、第二人称代名詞「您」という敬語を用いることによって、礼儀正しさを表わすと思われる。ところが、「你」の場合は、目上の「先生」に対し、ぞんざいな語気になりやすく、丁寧さが足りないように感じる。「嘗」という語と同じグループに属するものを食べる動作に関する語群がある。それらの語と「嘗」との間に尊敬程度の差があると前提として、筆者の内省によって、尊敬の程度が小さい方から大きい方へ並べることにする。それは、「吞」「啃」「嚼」「吃」「嘗」「品」との順番となる。「吞」「啃」「嚼」という語は日本語の「食う」、「吃」という語は「食べる」に当たるだろう。そして、「嘗」より尊敬の程度が高い「品」という語は「召し上がる」という尊敬語としての用法しか持たないことに対し、「嘗」という語は日本語の「召し上がる」と「いただく」という二つの用法を持つと思われる。

上の用例①②に示したように、第二人称代名詞「您」という敬語を用いるだけで、動詞を「嘗」にし「吃」にし、聞き手の「先生」への敬意を表わすと思われる。ところが、「你」を用いた用例③④と比較すれば、用例④の言い方は目上の先生には大変失礼に当たるのに対し、用例③では「嘗」という語が使用されるため、用例④よりも先生への敬意が感じられるように思える。つまり、「嘗」が「吃」より使い方が丁寧だと感じられることから、「嘗」には敬語の要素を含んでいることが推測される。

さて、尊敬用法と謙讓用法をともに持つ語に関連づけて、日本語の「たまはる（賜る）」と「申される」に触れることとする。菊地康人（1994）は「たまはる（賜る）」という語について、次のように指摘している³⁶⁾。『「たまはる」は、本来は、今日でいえば『いただく』の働きをする謙讓語であった。（略）ところが、ある時期から、（略）『くださる』にあたる尊敬語としての用法を生じた。』、という。

また、「申される」という敬語の尊敬用法の認否について、大石初太郎（1983）は、以下のよう
に説明した³⁷⁾。

「申される」の尊敬用法を肯定する側の論拠は、この場合の「申す」は謙讓語としてはたらい
ていず、丁寧語としてはたらいており、「申される」は「おっしゃる」などより、かしこまり・あら
たまりの感じの強い独自の表現価値をもつものであると見た。ところが、それを否定する側の論
拠には、「申す」は本来、謙讓語であること、ことばに気をつけている人々の規範意識において
「申す」は謙讓語であり、尊敬用法の「申される」に抵抗感をもつ者が多いこと、以上の二つが
ある。

上述の説をふまえると、日本語の「たまはる（賜る）」という語と同様に、中国語の「嘗」とい
う語も、尊敬語と謙讓語としての用法が用いられ、日本語の「申される」における尊敬用法の認
否と同様に、中国語の「嘗」という語も、尊敬語と謙讓語としての用法が乱れていると思われる。

次は、研究対象にみられた中国語の「嘗」という語を尊敬語及び謙讓語として用いられる例を、(A) 尊敬語としての用法、(B) 謙讓語としての用法、という二つに分けてみることにする。まず、『うたかた／サンクチュアリ』『サンクチュアリ』の一節を例として見よう。

夫を亡くしたばかりの馨と大学生の智明とは旅先で出会い、友達になった。この日、智明は馨の実家に招かれてやってきた。母親がカウンターの向こうから出した手造りのゼリーを受け取り、馨はそれを立ったままスプーンでぱくりと食べた、すると、流しに立った母親にしかられた。

「あんた本当にお行儀が悪いわよ。智明さんに先にお出ししてから、すわって食べなさい。」(省略)

①…「いただきます。」とゼリーを食べながら、まだ何となく部屋を見回している智明 (省略)³⁸⁾

「妳，這成什麼體統。也該先端給智明，再好好坐下來吃啊。」(省略)

②…「那，我就不客氣地嘗嘗了。」智明一邊吃起果凍來，一邊又不由自己地把這房間環視了一回 (省略)³⁹⁾

原文①「いただきます」に対応し、翻訳②では「嘗」という語が謙讓語としての用法が用いられていることがわかる。もう1例、前掲書「うたかた」の一節である。

鳥海人魚は、19歳で、大学生である。母と2人で暮らしている。父は、「となり町にある廃屋のような家でひとり、暮らししていた。」母とは結婚せずに、母娘の生活費を出している。父の家で育った養子の高田嵐とはこれまで会わずに育ったが、両親がネパールへ行ってから、ある日町ではじめて出会った。この日、人魚は、嵐の家に向かって急いでいたら、「商店街のはずれのところを通った時、『おい』と呼び止める声がした。見ると、くだものやのレジに嵐がすわっていた。」

「何してるの？」びっくりして私は言った。

「店番頼まれてるんだよ、おまえも入って働いて行け。」

①…「うん。」(省略)「退屈しないか？リングでも食うか？」嵐が言った。⁴⁰⁾

「你坐在那兒做什麼呀？」我好不詫異地問他。

「替他們照看生意啊，妳也進來幫忙吧。」

②…「好啊。」(省略)「覺得無聊不會？要不要拿個蘋果嚐嚐？」嵐說。⁴¹⁾

原文①「食う」には敬意を表わす語はないが、翻訳②「嘗」という語は尊敬語としての用法が用いられていることがわかる。

3. 2. 3. 1. まとめ

以上に述べたように、「嘗」という語は尊敬用法と謙讓用法をともに持つと仮定した。この仮説を日本語の「たまはる(賜る)」と「申される」とに関連づけて検討した。日本語の「たまはる(賜る)」という語と同様に、中国語の「嘗」という語も尊敬語と謙讓語としての用法が用いられ、日本語の「申される」における尊敬用法の認否と同様に、中国語の「嘗」という語も尊敬語と謙讓語としての用法が乱れていると思われる。尊敬用法と謙讓用法としての「嘗」をはっきりと認めうるかどうかは、今のところ決定可能な状況に達していないが、話し手が話題の人物や聞き手に対し、敬意を表わすために動作主を高めたり低めたりして、「您(你)嘗嘗」の尊敬語と、「我嘗嘗」の謙讓語という二つの用法を用いていることがわかる。

4. おわりに

本稿では、1989年から2004年にかけて、台湾で出版された吉本ばなの著作の翻訳（12点19種）を取り上げ、原著と対照しながら会話文における敬語表現を調べ、台湾における中国語社会の背景、及びその敬語表現の運用実態という二つに分けて論を進めた。

これまでの考察をもって、中国語は決して敬語に乏しい言語ではないことを証明してきた。過去に日本語教育を受けた世代が後退していく中で、日本語はあと10年もすれば台湾人の日常語の一部ではなくなると言われている。近年では台湾の若者にとって日本語は全くの外国語として接するのが一般的である。それにひきかえ、中国においてかつての階級制度の変動という社会体制の変化により使われなくなった敬語表現が、階級制度の変動を経験したことのない台湾社会のほうで、より保存されていることは明らかである。「您」「令堂」などの伝統的な敬語表現、また、「嘗」という尊敬用法と謙譲用法をともに持つ敬語表現の、台湾の中国語社会における使用頻度はそれを裏付ける。また、中国語にも日本語の「丁寧語」のような敬語表現が存在することを証明するにはやや不十分と思われるが、日本語における「丁寧語」の変遷（尊敬語と謙譲語から新しい丁寧語への順で成立）をみれば、中国語における「丁寧語」も現代化とともに、今後徐々に発達していくことが予想される。中国語における「丁寧語」を現在進行中の言語の変化として観察していくことが必要と思われる。

ところが、調査の段階において、日本語の多様な敬語表現を中国語に翻訳する場合は、それに対応する敬語表現が限られ、不足していることを痛感した。その原因の一つとして、前述したように中国語の敬語表現は主語の動作・状態を表わす形式が乏しいことが挙げられるが、その本質的な原因が中国語の構造において、敬語表現が人称的・選語的・接辞的・構文的表現に基づくことにあることは明らかである。

そこで、中国語の敬語における問題をより深く考えていくために、二つの手続きが必要と思われる。一つは、中国語には敬語を表わす文法形式が乏しいという問題を克服することである。もう一つは、台湾の中国語社会における敬語表現を貴重な資料とし、中国の中国語社会における敬語表現との比較研究に取り組むことである。その研究成果によって、中国語の敬語に体系性が存在しているかどうかを解明し、より体系的な日本型の敬語モデルを対照研究の基盤とし、中国語における敬語問題の全面的な考察を発展させることにより、中国語敬語の体系構築に寄与したい。

注

- 1) 1964年7月24日東京都生まれ。A型。日本大学芸術学部文芸学科卒業。本名吉本真秀子。詩人・思想家の吉本隆明の次女。87年11月小説「キッチン」で第6回海燕新入文学賞、88年1月『キッチン』で泉鏡花文学賞、同年8月『うたかた／サンクチュアリ』で第39回芸術選奨文部大臣新人賞、89年3月『TUGUMI』で第2回山本周五郎賞、93年6月イタリアのスカノ賞、95年11月『アムリタ』で第5回紫式部賞、96年3月イタリアのフェンディッシメ文学賞「Under35」、99年11月イタリアのマスケラ・ダルジェント賞文学部門、00年9月『不倫と南米』で第10回ドゥマゴ文学賞を受賞。『キッチン』をはじめ、著書はアメリカ、ヨーロッパ、台湾など海外30数カ国で翻訳、出版されている。
- 2) その対象リストは〈表1 台湾における吉本ばなな著作翻訳一覧〉の通りになる。

表1 台湾における吉本ばなな著作翻訳一覧

中国語訳刊本	吉本ばななの著作本
《我愛廚房》、1989年8月、皇冠出版社、郭清華訳／（絶版） 《蜉蝣》、1990年8月、世茂出版社、廖瑞貞編／（絶版） 《廚房》、1999年12月、時報文化、吳繼文訳	「キッチン」：『海燕』1987年11月号（第6回海燕新入文学賞受賞） 「満月」：『海燕』1988年2月号 「ムーンライト・シャドウ」：日本大学芸術学部、 1986年度卒業制作（芸術学部長賞受賞） 『キッチン』、1988年1月、福武書店（現在ベネッセ） ◆『キッチン』、1991年10月、福武文庫（現在ベネッセ） 同書、1998年6月、角川文庫 同書、2002年7月、新潮文庫
《鶴 TUGUMI》、1989年10月、林白出版社、林敏生訳／（絶版） 《燕子表妹 TUGUMI》、1989年12月、文経出版社、廖為智訳／（絶版） 《鶴 TUGUMI》、2004年9月、時報文化、吳繼文訳	「TUGUMI つぐみ」：『マリ・クレール』 1988年4月号～1989年3月号に連載 ◆『TUGUMI つぐみ』、1989年3月、中央公論社 同書、1992年3月、中公文庫
《白河夜船》、1989年10月、故郷出版社、 黄翠娥・黄素英・楊慶鏐 訳／（絶版） 《白河夜船》、2000年8月、時報文化、吳繼文訳	「白河夜船」：『海燕』1988年12月号 「夜と夜の旅人」：『海燕』1989年4月号 「ある体験」：『海燕』1989年7月号 『白河夜船』、1989年7月、福武書店（現在ベネッセ） ◆『白河夜船』、1992年2月、福武文庫（現在ベネッセ） 同書、1998年4月、角川文庫 同書、2002年9月、新潮文庫
《泡沫人生》、1990年2月、幼獅文化、薛柏谷訳 《聖域》、1990年5月、同社、同訳者 （原作『うたかた／サンクチュアリ』で収録された2篇の作品は中国語訳版では出版社側の出版事情により、『泡沫人生（うたかた）』と『聖域（サンクチュアリ）』の2冊に分けて出版された。）	「うたかた」：『海燕』1988年5月号（第99回芥川賞候補作） 「サンクチュアリ」：『海燕』1988年8月号（第100回芥川賞候補作） ◆『うたかた／サンクチュアリ』、1988年8月、福武書店（現在ベネッセ） 同書、1991年11月、福武文庫（現在ベネッセ） 同書、1997年12月、角川文庫 同書、2002年9月、新潮文庫
《N・P》、1991年9月、皇冠文學出版有限公司、 陳正玲訳／郭清華主編（絶版） 《N・P》、2002年11月、時報文化、吳繼文訳	『N・P』、1990年12月、角川書店 「N・P」：発表／『野性時代』1991年1月号 ◆『N・P』、1992年11月、角川文庫

中国語訳刊本	吉本ばななの著作本
《甘露》、1995年6月、時報文化、劉慕沙訳	◆『アムリタ（上）（下）』、1994年1月、福武書店（現在ベネッセ）同書、1997年1月、角川文庫 [1994年1月、福武書店（現在ベネッセ）より、単行本として刊行されたものに「何も変わらない」（書き下ろし）を加えた作品] 同書、2002年9月、新潮文庫
《哀愁の預感》、1996年2月、時報文化、吳繼文訳	『哀しい予感』、1988年12月、角川書店 （『野性時代』1988年12月号に掲載した作品） ◆『哀しい予感』、1991年9月、角川文庫 （1988年12月、角川書店より、単行本として刊行されたものに、加筆訂正した作品）
《蜥蜴》、1999年7月、時報文化、吳繼文訳	「新婚さん」：JR 東日本車内中吊りポスター 「連載中吊り小説」、1991年1月～3月 「とかげ」：『小説新潮』、1992年8月号 「らせん」：『トロイの月』（原マスミ著角川文庫）1990年12月25日 「キムチの夢」：『LITERARY Switch』No.5 September,1992 「血と水」：『小説新潮』、1991年7月号 「大川端奇譚」：『野性時代』、1993年2月号 ◆『とかげ』、1993年4月、新潮社 『とかげ』、1996年6月、新潮文庫
《蜜月旅行》、2001年3月、時報文化、吳繼文訳	◆『ハネムーン』、1997年12月、中央公論社 『ハネムーン』、2000年7月、中公文庫
《無情／厄運》、2001年9月、時報文化、劉慕沙訳	◆『ハードボイルド／ハードラック』、1999年4月、ロッキング・オン 『ハードボイルド／ハードラック』、2001年8月、幻冬舎文庫
《身體都知道》、2002年3月、時報文化、陳寶蓮訳	「ボート」・「田所さん」・「おやじの味」： 「文藝春秋」、2000年2月号 ◆『体は全部知っている』、2000年9月、文藝春秋 （上記の3篇以外は書き下ろし作品である。） 同書、2002年12月、文春文庫
《不倫與南美》、2004年1月、時報文化、陳寶蓮訳	◆『不倫と南美』、2000年3月、幻冬舎 『不倫と南美 世界の旅③』、2003年8月、幻冬舎文庫
合計：12点19種	

表注1：◆が付いたのは底本とすることをさす。また、順番は中国語訳刊本の出版年代順に従う。

表注2：本稿が研究調査を行い終えたあとの現時点において、2004年10月から2005年3月にかけて、吉本作品の翻訳著作が3冊台湾で出版されている。そのリストは〈表2 台湾における吉本ばなな著作翻訳一覧補足〉の通りになる。

表2 台湾における吉本ばなな著作翻訳一覧補足

中国語訳刊本	吉本ばななの著作本
《原來如此的對話》、2004年10月、時報文化、 銀色快手・黃心寧訳	◆『なるほどの對話』（河合隼雄氏との対談）、2002年4月、NHK 出版 同書、2005年9月、新潮文庫
《王國 vol.1—仙女座高台》、2005年1月、時報文化、陳寶蓮訳	◆『王国（その1）アンドロメダ・ハイツ』、2002年8月、新潮社
《虹》、2005年3月、時報文化、陳寶蓮訳	◆『虹』、2002年5月、幻冬舎 『虹—世界の旅〈4〉』、2005年4月、幻冬舎文庫

3) 藤堂明保 1974 「中国語の敬語」『敬語講座第8巻 世界の敬語』 明治書院 157～160頁

4) 蘇徳昌 1979 「揺れる中国語の敬語」『月刊言語』（vol.8、No.6） 大修館書店 62～64頁

- 5) 蘇徳昌 1987 「人間関係と敬語一日中の比較論的視点から」『日本文化研究所研究報告』
(第23集) 東北大学文学部附属日本文化研究施設 90頁
- 6) 王鉄橋 1990 「日中敬語表現と儒教文化一日中両語教育への提言」『言語と文化』
(第3号) 立教大学言語文化研究所 24頁
- 7) 彭國躍 (2002) は、敬語をすべて「敬辞」と称している。
- 8) 彭國躍 2002 『近代中国語の敬語システム：「陰陽」文化認知モデル』 白帝社 193頁
- 9) 太田辰夫 1972 「中国における敬語の問題」『言語生活』(No.249) 筑摩書房 44～49頁
- 10) 王鉄橋 1989 「現代中国語の敬語表現—日本語との比較—」『言語と文化』(第2号)
立教大学言語文化研究所 27頁、44頁
- 11) 吉本ばなな 2000 「みどりのゆび」『体は全部知っている』 文藝春秋 15頁
- 12) 吉本ばなな著・陳寶蓮訳 2002 「緑手指」《身體都知道》 時報文化 16頁
- 13) 鄭良偉 H・J・オータ 1991 「台湾の言語」『月刊言語』(vol.20, No.3) 大修館書店 88頁
- 14) 注6 参照、25～26頁
- 15) 吉本ばなな1999 「ハードラック」『ハードボイルド/ハードラック』 ロッキング・オン
94～95頁、104～105頁
- 16) 吉本ばなな著・劉慕沙訳 2001 「厄運」《無情／厄運》 時報文化 88～89頁、98頁
- 17) 金田一春彦 1988 『日本語新版(上)』 岩波書店 70頁
- 18) 齋藤 齊 1995 「連載 台湾をフィールドワークする3 中華民国が台湾にあることの
〈包袱〉」『月刊言語』(vol.24, No.3) 大修館書店 90頁
- 19) 若林正丈 1997 『台湾の台湾語人・中国語人・日本語人 台湾人の夢と現実』
朝日新聞社 5頁
- 20) 「嘗」の字体について説明する。台湾において、「嘗」のほかに「嚐」という活字も使わ
れている。『新編東方國語辭典(1976年、台北東方出版社)』を引くと、『嚐』は『嘗味
(体験する。味わう。)]の『嘗』と同じである」、と解釈される。作品の中の用例には、ど
ちらの字体も用いられているが、本稿では、「嘗」という字体に統一する。
- 21) 注8 参照、152頁
- 22) 注10参照、33頁
- 23) 金田一春彦 1988 『日本語新版(下)』 岩波書店 166～167頁
- 24) この点に関しては、沈錫倫(1996)によって明解にまとめられているのでここでは贅言を
避けたい。
- 25) 「漢民族は昔から親疎観念を重んじ、人間関係における「ソト・ウチ」意識をはっきりさせ
ている」(筆者訳) 常敬宇 1995 『漢語詞匯與文化』 北京大學出版社 29頁
- 26) 吉本ばなな 1993 「大川端奇譚」『とかげ』 新潮社 176～177頁
- 27) 吉本ばなな著・吳繼文訳 1999 「大川端奇譚」《蜥蜴》 時報文化 161～162頁
- 28) 吉本ばなな 1997 『ハネムーン』 中央公論社 74頁
- 29) 吉本ばなな著・吳繼文訳 2001 《蜜月旅行》 時報文化 65頁
- 30) 安 秉禧 1981 「敬語の対照言語学的考察」『講座日本語学9 敬語史』 明治書院 96頁

- 31) 井上史雄 1995 「丁寧表現の現在—デス・マスの行方」『国文学解釈と教材の研究』
(第40巻14号、12月号) 学燈社 54～57頁
- 32) 曾根博義 1991 「解説」『キッチン』 福武文庫 (現在ベネッセ) 236～237頁
- 33) 注7・8参照、65頁
- 34) 吉本ばなな 1991 「単行本あとがき」『キッチン』 福武文庫 (現在ベネッセ) 224頁
- 35) 吉本ばなな著・呉繼文訳 1999 「単行本後記」《厨房》 時報文化 194頁
- 36) 菊地康人 1994 『敬語』 角川書店 178頁
- 37) 大石初太郎 1983『『申される』という敬語』『現代敬語研究』 筑摩書房 309頁、322頁、324頁
- 38) 吉本ばなな 1988 「サンクチュアリ」『うたかた／サンクチュアリ』
福武書店 (現在ベネッセ) 172～173頁
- 39) 吉本ばなな著・薛柏谷訳 1990 《聖域》 幼獅文化 64～65頁
- 40) 「うたかた」(注38参照)、50～52頁
- 41) 吉本ばなな著・薛柏谷訳 1990 〈泡沫人生〉 幼獅文化 41～42頁

Polite speech in Japanese and Chinese :

Yoshimoto Banana's works and these Chinese translations

日語與漢語的敬語表現—以吉本芭娜娜的作品及其翻譯著作為研究題材

陳 瑞紅

本篇論文，以 1989 年至 2004 年間，日本作家吉本芭娜娜在台灣出版的翻譯作品（12 冊作品 19 種譯本）為對象，對照原文調查會話中的敬語表現；研究內容係針對，台灣地區的漢語社會背景、以及在該背景下，敬語表現在台灣地區語言生活中的運用實態，就這兩方面進行研究考察。

首先，從語言的觀點上，探討台灣過去一世紀中歷經戰前日本殖民時代「國語」（日語）教育，和戰後中華民國政府「國語」（中國普通話）教育之背景下，對台灣語言生活所產生的影響。接著，經由研究對象的用例分析，從以下三方面，進行考察台灣地區漢語社會的敬語運用實態。分別為：第二人稱代名詞—以敬語「您」為中心、漢語的「丁寧語」問題—與日語的丁寧語「です・ます體」進行比較對照為中心、以及，漢語裡是否有同時兼具尊敬與謙讓兩項用法的敬語—以「嘗」一語為中心。

研究結果證明，漢語決不可說是一種缺乏敬語的語言。隨著台灣過去日本殖民時代接受日語教育這個世代的衰退，有學者預測再過 10 年，日語將不屬於台灣的日常語言之一，而實際上，台灣現代社會亦已普遍將日語學習視為一種外文進修。反之，論文中調查發現「您」「令堂」這些傳統敬語、「嘗」這個同時兼具尊敬和謙讓兩項用法的敬語，在台灣語言社會中使用頻率極為頻繁；筆者認為，與中國相較之下，台灣地區的漢語社會，因從未經歷過像中國社會體制改革及革命變動的巨大影響，所以至今仍保存著相當完整的敬語表現。這個論說也經由上述研究結果得到印證。另就漢語裡假設也有如同日語「丁寧語」這種敬語用法並進行考證。論點雖不盡完善，但透過日語「丁寧語」的變遷過程來看，筆者推測隨著現代化日趨發展之下，漢語的「丁寧語」敬語表現，今後也會在漢語社會中漸漸發達起來。